

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成26年 5月23日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科 言語学専修

職名・学年 博士後期課程2年

氏名 落合 いずみ

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第7回オーストロネシア・パプア諸語言語学学会 Seventh Austronesian and Papuan Languages and Linguistics Conference		
発表題目	Perfect infix confusion between actor voice and undergoer voice in Paran Seediq		
開催場所	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (SOAS, University of London)		
渡航期間	平成26年5月15日 ~ 平成26年5月18日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃・交通費	200,000円
		滞在費	40,000円
学会参加登録料		10,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

## 成果の概要／落合いずみ

本発表は初め、「Perfect infix confusion between actor voice and undergoer voice in Paran Seediq (セデック語パラン方言における行為者ヴォイスと非行為者ヴォイスの間の完了形の混乱について)」という題であったが、発表時は「Perfect in Paran Seediq: Should it be actor voice or undergoer voice? (セデック語パラン方言の完了: 行為者ヴォイスか非行為者ヴォイスか)」という題に変えた。旧題は長すぎたし、印象的でなかったためである。

本発表ではセデック語パラン方言について、三つの要点を伝えた。第一点は、接中辞 *mn* が音変化によって *n* と自由交替するようになったこと。第二点は、接中辞 *mn* が別の接中辞 *n* と統語に併合されたこと。第三点は、この統合は百年以内に起きた新しい変化だということである。

この研究のきっかけとなったのは、セデック語パラン方言の *m* と *n* との音交替であった。この二つが語中で交替することがあり、*m* と *n* の区別が失われてしまう劇的な変化は驚きであった。例えば、*sumukuxun~smkuxun* 「好きだ」は、*snkuxun* と発音されることのほうが多い。また、このとき *n* は成節的である。

この *m* から *n* への劇的な音変化は、もともと *n* という接中辞があるため、それらが同音になって区別できなくなるという問題があるように見える。実際のところは、*m* と *n* が交替する単語は *n* 接中辞を持った形を欠くために、問題がないことがわかった。

この音交替に関連して、さらに不思議な現象が見られた。接中辞 *mn* が接中辞 *n* と同一視されるというものである。接中辞 *mn* は行為者ヴォイスの完了形を意味する形態素であり、接中辞 *n* は非行為者ヴォイス目的語主語完了形を意味する形態素である。この二つの形態素が同一視されるに至った直接的な理由は *mn* と *n* が交替する音変化にある。

セデック語パラン方言の音韻論について簡潔にのべると、二音節以上から構成され、次末音節に強勢が置かれる。強勢音節より前の音節は母音が弱化し、*u* に近い音やあいまい母音になるか、脱落する。特に、鼻音の後で母音脱落が顕著である。そのため、接中辞の *mn* が付くと、典型的な音節構造は、*Cm.nV.CVC* となり、分節音 *m* は強勢のない音節に入る。そしてこの *m* は、さきに述べた *m* から *n* への劇的な変化と同様 *n* と発音されるようになった (*Cn.nV.CVC*)。また、セデック語パラン方言は、分節音の長さが弁別的でないため、子音連続の *mn* は単独分節音の *n* と同音とみなされる。そのため、*C.nV.CVC* と発音されてもよいことになる。

以上の音変化により、接中辞 *mn* が接中辞 *n* が統語上も同一視されるようになった。つまり、本来行為者ヴォイスの *mn* が、非行為者ヴォイスとしても用いられ、本来非行為者ヴォイスの *n* が行為者ヴォイスとしても用いられるようになった。以下に四例挙げる。意味はどれも、「私は昨日、テムの畑を刈った」である。

- (1) *t<mn>atak ku neepah na Temu ciga.*  
 <AV.PERF>mow 1SG.NOM field GEN Temu yesterday  
 ‘I mowed Temu’s field yesterday.’
- (2) *t<mn>atak mu neepah na Temu ciga.*  
 <UVP.PERF>mow 1SG.GEN field GEN Temu yesterday  
 ‘I mowed Temu’s field yesterday (Lit. Temu’s field was what I mowed yesterday).’
- (3) *t<n>atak mu neepah na Temu ciga.*  
 <UVP.PERF>mow 1SG.GEN field GEN Temu yesterday  
 ‘I mowed Temu’s field yesterday (Lit. Temu’s field was what I mowed yesterday).’
- (4) *t<n>atak ku neepah na Temu ciga.*  
 <AV.PERF>mow 1SG.NOM field GEN Temu yesterday  
 ‘I mowed Temu’s field yesterday.’

上の例では一人称単数の行為者（主格は *ku* で属格は *mu*）を用いている。行為者が主格の場合、その構文は行為者ヴォイスであり、行為者が属格の場合、その構文は非行為者ヴォイスである。上の例(1)と(4)は行為者ヴォイスに当たり、(2)と(3)は非行為者ヴォイスにあたる。接中辞に注目すると、(1)は *mn* で(4)は *n*、(2)は *mn* で(3)は *n* である。つまり、*mn* も *n* も同等に扱われている。

この *mn* と *n* の併合の直接的理由はもちろん音変化にあるが、もうひとつの可能性として、完了形の視点から考えることもできる。この変化は二つの完了時制の形態素に起こった変化である。完了は動作の結果として目的物に起こった変化に焦点が当たることが多く、行為者の存在が希薄になる傾向がある。だとすれば、行為者ヴォイスであっても、完了形においてのみ、非行為者ヴォイスのようにふるまうということも不思議ではない。アンダーソン (Anderson 1977:336) の言葉を借りれば、

受け身構文は、一般的に完了した行為の結果状態を表わすという点で、意味的に完了に近い。例えば、ある言語が、屈折した完了形を（音韻的な変化や使われ方の変化により）失った場合、本来の受け身がその範囲を広げて欠如部分を補うようになったと主張しても妥当である。（報告者訳）

セデック語パラン方言の状況と完全に一致するわけではないが、非常に類似したコメントである。パラン方言の場合、*mn* が非行為者ヴォイスにまで範囲を広げ、逆に *n* も行為者

ヴォイスに範囲を広げた。

また、この変化は比較的最近起きたものである。いまのところ別の方言であるタロコ方言には報告されていないし、最も古いパラン方言の記録である小川と浅井の台湾諸語物語集を調べたところ、mn と n が混同されているような例は見つけられなかった。彼らのパラン方言調査は 1927 年であったため、当該変化はそれ以後に起きたと予想される。

今後さらにデータを集め、どのような動詞がこのパターンを示すかを確かめなければならない。また、他言語で同様の変化がないかどうか調べる必要がある。

発表の要点をまとめると、接中辞 mn は音変化により接中辞 n と統語的にも併合した。この変化は 1927 年以降に起きた新しいものである。

#### 参考文献

- Anderson, Stephen R. 1977. "On Mechanisms by Which Languages Become Ergative."  
In *Mechanisms of Syntactic Change*, edited by Charles N. Li, 317-363. Austin:  
University of Texas Press.
- Ogawa, Naoyoshi and Asai Erin. 1935. *Myths and Traditions of the Formosan Native Tribes*. Taipei: Taihoku Imperial University.

#### 略号

AV	actor voice	PERF	perfect
GEN	genitive	UVP	undergoer voice, patient subject
NOM	nominative		